

ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』における故郷について —D. E.を例に—

西尾 悠子

要旨

„[D]ie Suche nach Heimat, der verlorenen und wünschenswerten“,¹⁾ spielt in Johnsons Hauptwerk *Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl* eine zentrale Rolle. Gesine Cresspahl, gebürtige Mecklenburgerin, die aufgrund ihrer politisch-moralischen Unstimmigkeit mit der DDR ihr Land verließ und zum Zeitpunkt des Romans in New York lebt, ist stets auf der Suche nach einem Ort, in dem sie, ohne schuldig zu werden, leben kann. Die Tetralogie umfasst jedoch nicht nur das Leben der Protagonistin. In ihrem Großstadtleben pflegt sie Umgang mit Personen unterschiedlicher Hintergründe: Die einen wurden von ihrer Heimat vertrieben, die anderen haben nicht die Möglichkeit, eine andere Heimat zu wählen, oder fühlen sich nirgendwo auf der Welt heimisch. Durch das gesamte Werk wird gefragt, was überhaupt eine Heimat ist oder sein kann. Das Ziel dieser Arbeit ist, anhand des Beispiels D. E., der als die „Gegenfigur“ zu Gesine gilt, die Komplexität und Differenziertheit des Heimatbegriffs in den *Jahrestagen* zu veranschaulichen.

キーワード：ヨーンゾン，故郷，記憶，E・ブロッホ，I・M・グレーヴェルス

1. はじめに

ウーヴェ・ヨーンゾンの集大成でもある長編四部作『記念の日々 — ゲジーネ・クレスパールの生活より』*Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl*において、「失われた故郷と願わしい故郷の探求」²⁾は作品の底を流れるテーマである。中でも生まれ育ったドイツ北東部のメクレンブルク地方を後にし、アメリカ・ニューヨークに居を構えている主人公のゲジーネ・クレスパールの「失われた故郷と願わしい故郷の探求」は、今日に至るまで活発に議論されている。

『記念の日々』における「故郷」の問題をめぐっては、大まかに二つの流れが存在する。一つは、メクレンブルクの描写を郷愁的かつ感傷的であるとする流れである。文芸批評家のM・ライヒ＝ラニツキは同作品を失われた故郷の風景を礼賛するナチス時代の

「血と土の文学」と結びつけ³⁾、B・ノイマンは「郷愁に駆り立てられた北ドイツ版の『失われた時を求めて』」⁴⁾と評した。これらの一面的な主張を論破しようと試みたのが、故郷を「すでに失われたもの」(Nicht-Mehr)、「未だ実現されていないもの」(Noch-Nicht)として批判的に考察する流れである。作品の時間と空間の構造に注目し、ゲジエネの失われたメクレンブルクでの日々(過去)／ニューヨークでの日常(現在)／社会主義が実現され得る理想的な世界(未来)を「故郷」という観点から分析したP・ポーケイ⁵⁾や、メクレンブルクの地域性に着目し、メクレンブルク=桃源郷^{アルカディア}をゲジエネの「出発点」、社会主義=理想郷^{ユートピア}を「終着点」としたN・メクレンブルク⁶⁾、「故郷」という概念が語りの中で果たす役割や、「故郷」に対する認識がゲジエネを中心とする女性の系譜の中でどのように発展していったかについて論じたG・ブルーデ=フィルナウ⁷⁾などの成果が挙げられる。

ドイツ語の「故郷」Heimatという言葉は多義的であるが、これらの先行研究においては、必ずしも明確に定義されていない。文化人類学者のH・バウジンガーが指摘しているように、「故郷」とは明瞭なようで極めて不透明かつあいまいな概念である⁸⁾。グリムのドイツ語辞典は、故郷を一に「生まれた、または長期にわたって滞在している国あるいは地域」、二に「生まれた場所、あるいは恒久的な住居」と定義している⁹⁾。ドイツ語辞書Dudenを開くと、「(生まれ)育った国、地域あるいは場所」または「恒久的な滞在によりアットホームな感覚を抱ける場所」となっている¹⁰⁾。ドイツ語における「故郷」Heimatの基本的な定義は土地と密接に結びついており、暗黙のうちに共通認識として浸透しているといえるだろう。しかしポーケイやメクレンブルクによれば、「故郷」は実在している場所である必要はない。未だに実現されていないユートピアも故郷となり得るのである。「疎外感が生じる場所は、故郷ではない」¹¹⁾、ならびに「故郷とは心地よく生きられるところ、すなわちユートピアである」¹²⁾とするメクレンブルクの主張は、故郷を「すべての人間の幼年期を照らしたすものであるとともにまだかつて誰も行ったことのないところ」と見なしたE・ブロッホの『希望の原理』¹³⁾に連なる。

これらの定義に従えば、「故郷」という概念は出自と定住、そしてユートピアと結びつけられる。しかし『記念の日々』に見られる多様な故郷の像は、上記の定義だけでは収まらない。近年では、P・M・シュミッツ¹⁴⁾やK・フェルスナー¹⁵⁾がヨーンゾン作品における「故郷」の複雑性に言及した上で分析を行っている。しかしながら研究の対象はほとんどゲジエネ一人に絞られており、様々な理由から故郷を失ったその他の人々に関しては、これまで踏み込んだ考察はなされていない。ゲジエネの恋人のD.E.も、そのうちの一人である。本稿ではD.E.を例に挙げ、『記念の日々』における故郷の問題を再考するための足掛かりを提示する。

2. すべてにおいて対照的な二人？——ゲジーネとD. E.について

故郷について論じる際、D. E.はゲジーネと「すべてにおいて対照的な人物」としてしばしば引き合いに出される¹⁶⁾。ほぼ同じ背景を持つ二人の決定的な違いは、各々の現在と過去と向き合う姿勢である。

ナチ政権、ソ連軍による占領、更には東ドイツの社会主義体制を引き続いて体験したゲジーネは、1953年6月17日に発生した東ベルリン暴動を機に東ドイツを去り、西ドイツを経て生活拠点をニューヨークに移した。引っ越しを重ねるたびに、そこが旅の終着点であればいいと願うゲジーネだが、彼女の政治観とモラルは一切の妥協を許さない。どれほどその土地に愛着を覚えようとも、政治の面においてもモラルの面においても賛同を示すことができなければ、その領域を「故郷」と見なすことができない¹⁷⁾。ナチスの時代に生まれたゲジーネがなによりも渴望しているのは、これ以上の罪を重ねずに生きることを可能にする場所である¹⁸⁾。毅然とした態度で国が犯した罪と向き合わないドイツも、人種差別の横行を許し、ベトナム戦争を正当化しているアメリカも、ゲジーネにとっては等しく罪を背負っている国だ。メクレンブルクへの郷愁を募らせながらも帰国を拒み、アメリカでも異邦人にならざるを得ない彼女は、チェコスロバキアの民主化運動「プラハの春」に理想の故郷を投影し、その実現のために尽力する。

D. E.、本名ディートリヒ・エリクソンもゲジーネと同じくメクレンブルク地方の出身であり、ほぼ同時期に東ドイツを後にしている。移住先の西ドイツで物理学と化学の分野で博士号を取得し、イギリスへと渡ったD. E.は、やがてその技量をアメリカに買われ、渡米を決意する。以来、ニュー・ジャージーの工業地帯にある企業に勤めながら、西側諸国と東側諸国を隔てる壁が建設される前にメクレンブルクから連れ出した母親と二人で暮らしている。ゲジーネとは対照的に、D. E.は早々にアメリカの生活に溶け込んだ。大学の講義ではアメリカで標準的とされる数学記号を使いこなし、その筆跡すらもアメリカの流儀に則っている。すでにアメリカ国籍も取得しており、同じくアメリカン・ライフスタイルに慣れ親しんでいるゲジーネの娘・マリーによって与えられた「D. E.」という愛称は、本名であるところのディートリヒ・エリクソンのイニシャル表記であると同時に、英語で「親愛なる^{ディアア}エリクソン」という意味も持っている。そんなD. E.について、ゲジーネは次のように述べている。

わたしたちはすでに、出身地すら同じくしてはいない。自分の過去、人々と国、シュースティング・ブラントとヴェンディッシュ・ブルク、彼 [D. E.] にとっては現実ではない。彼は自分の思い出を知識に置き換えたのだ。彼がほかの人々と過ごしたほんの十四年前のメクレンブルクの人生、それはアーカイブの中のように片づけられ

てしまっていて、そこで彼は人物や街に関する記録を最新の情報に更新し、死亡が確認された場合には封印を施す。たしかに、すべては現存していて自由に呼び起こすことが可能だが、生きていない。彼はもう、それらとともに生きてはいないのだ¹⁹⁾。

十数年前にギュストローを訪れた際、ゲジーネは親友のアニータと「子どもが育ち、人生を学ぶ風景の必要不可欠性」²⁰⁾について思うところを語り合った。十代のゲジーネにとって、出自、過去、家族をはじめ、幼年期と結びつくものはすべて故郷の風景の一部であり、なくてはならないものだった。それから十年以上の年月が流れた現在もなお、ゲジーネはメクレンブルクの日々を胸に刻んで生きている。一方、政府の方針に異議を申し立てたがために東ベルリンの大学を除籍された D. E. は、「自分の将来の展望はここ [東ドイツ] では芳しくない」²¹⁾という理由から、生まれ故郷のヴェンディッシュ・ブルクにも、だらだらと続いていた恋愛関係にも見切りをつけ、西ドイツへ移住した。東ドイツに対する信頼も、社会主義思想に対する情熱も失われた。彼の社会主義に対する取り組みは今や表層的な「理論の演習」に過ぎず、趣味の域を出ない²²⁾。ゲジーネが「子どものころの夢」²³⁾社会主義の実現を願ってやまないのに対し、「個人的な抗議運動をすっかり諦め、それによって根本的な状況の変化をも放棄している姿勢」²⁴⁾を示す D. E. は、ゲジーネが望みを懸ける「プラハの春」政策をも「実現するはずがない」²⁵⁾と一蹴している。D. E. がメクレンブルクで過ごした日々は、彼の人生にとってもはや意味をなさないのである。

メクレンブルクへの郷愁を捨て去ることができず、アメリカ社会に同調することもできないゲジーネと、己の過去と袂を分かち、新天地・アメリカでの生活を謳歌しているように見える D. E. は、確かに対照的な存在であるといえるだろう。想起というかたちで失った故郷を保持することができるゲジーネは、マリーという聞き手に自らの過去を語ることにより、その都度新たに己の出自について考えをめぐらせることができる。対する D. E. にとってメクレンブルクでの思い出は個々の事実過ぎず、これまで歩んできた人生も彼にとっては「語るに足りない」²⁶⁾ものでしかない。まるで正反対の生き方をしているかのように見える二人だが、それでも彼らを「すべてにおいて対照的」と言い切ってしまうことについては疑問が残る。以下、D. E. 自身が行う語り注目し、彼の言葉や立ち居振る舞いを詳しく分析する。

3. 「語るに足りない」物語

D. E. は自分自身の「物語」²⁷⁾を語ることを好まない。自らの人生を「ルールに則った、社会という名の機械の交錯するガラス版によってしかるべく刻印された」²⁸⁾ものであるとし、「語るに足りない」と切り捨てる D. E. は、状況が許す限り自分の過去について言

及することを避けようとする。D. E.がメクレンブルクで過ごした幼少期、少年期について自らの言葉で語るのは、「1968年5月11日」の章の一度きりである。D. E.がいつものようにクレスパール母子を訪問すると、マリーに自分の「物語」を語るようにせがまれる。気乗りのしないD. E.は、すぐに本題に入らないことによって最後の抵抗を試みるが、やがて観念して重い口を開く。

3. 1 沈黙は語る

1928年、D. E.は美容師の息子としてメクレンブルクの小さな町ヴェンディッシュ・ブルクに生まれた。親戚一同の手によって都会よりもメクレンブルクの田園風景を愛する少年へと成長したD. E.は、やがてヒトラー・ユージェントへの加入を余儀なくされ、海軍部を経て空軍部へと配属される。それでも戦争とはほとんど縁のない生活を送っていた少年は、ある日高射砲の授業でその知識を買われ、空中戦闘が展開されていたベルリンに送り込まれることになる。そしてD. E.は、1945年の1月に脱走を図るまで、空軍の補佐として戦場に立ち続けていたという。

D. E.の半生は、事実が列挙されているだけの報告書を読み上げるかのように淡々と語られる。そこに感情の変化はほとんど見られない。ゲジーネの言葉を借りるならば、彼の記憶は「現存していて自由に呼び起こすことが可能だが、生きていない」ということになるのだろう。しかしD. E.の昔語りには、意外なかたちで結末を迎える。脱走兵となり、ヴェンディッシュ・ブルク近郊の森に数か月間潜伏していたD. E.は、赤軍が地元のギムナジウムを解放したという噂を聞きつけ、故郷へと向かった。彼の帰りを待つ母と、五歳下の妹ハイケのもとへ駆けつけるためである。その結果、「彼 [D. E.] は、自分のもとへ逃げてこようとした妹と行き違いになった」²⁹⁾のだという。D. E.の昔話はここで唐突に終わる。第三者によって話の腰が折られたという形跡はない。やがて好奇心旺盛なマリーはD. E.に次々と質問を投げかける。その中には、ハイケの行く末に関する問いも含まれている。

- それで、あなたの妹は？
- 1945年の5月に死んだよ。
- 何歳だったの？
- 45年7月のゲジーネと同じだよ。
- それ以上は話してくれないの？
- これ以上はね、いとしいマリー、僕のうちに留めておくことにするよ。³⁰⁾

二人のやりとりを通じて、D. E.が女性たちを赤軍兵士から守るためにヴェンディッシ

ユ・ブルク近郊の森に潜伏していたこと、そしてハイケが十二歳で亡くなっていたことが判明する。兄が森を出た矢先に、妹は森に足を踏み入れた。その後、彼女は亡くなった。それ以上は、なにも語られない。後日明らかになるアニータの過去³¹⁾とも相まって、D. E.の沈黙からハイケが森の中でソビエト兵士に捕えられ、強姦、殺害されたと推測できる³²⁾。

なぜD. E.は、昔語りの中で妹の死を避けて通ろうとしたのか。そしてなおも、妹の死について沈黙を守るのか。D. E.の言動から、彼の真意を直接伺い知ることはできない。しかしその沈黙は、彼にとって妹の死は話したくないこと、あるいは話せないことであると如実に物語っている。自身の恋愛遍歴や戦場の悲惨さについて語ることに躊躇する様子を見せていないことから、ゲジーネやマリーに配慮したと解釈することには違和感がある。どのような真意が隠されているにせよ、そもそも自分について語るのを回避しようとする傾向が見られる以上、D. E.が口をつぐんだのは個人的な理由からだと考える。その場合、D. E.が思い出とともに生きていないとするゲジーネの主張は的確ではなくなる。言葉にするのをためらう理由がある以上、妹の死にまつわる思い出はD. E.の中で今も息づいているといえる。

3. 2 動かぬ記憶

「君は話すことができる。僕はそれができない」³³⁾。1968年3月3日、ゲジーネの誕生日に書いた手紙の中で、D. E.はこう述べている。語る言葉を持っていると思うからこそ、マリーに1947年当時のロシア人について積極的に話してやるべきだとD. E.はゲジーネを諭す³⁴⁾。彼の言う「話すことができる」「話すことができない」は、前節で論じた彼の沈黙に深く関わっている。

『記念の日々』全体を通して、ゲジーネは娘のマリーに「かつてわたしだった子ども」³⁵⁾が自分を取り巻く世界をどのように理解していたかを伝えようと試みている。彼女の語る「物語」は、すべてが事実即しているわけではない。中には父ハインリヒと母リースペートに関する一連のエピソードなど、生まれる前の、あるいは物心つく前のゲジーネが直接知りようもない話も数多く存在する。だがゲジーネにとって重要なのは、事実を正確に供述することではない。あのとき父は、母はなにを思っていたのか。「かつてわたしだった子ども」はなにを考えていたのだろうか。後になって自分が見聞きした情報を頼りに、ゲジーネは過ぎ去りし日々と向き合い、自分という人間がどのように形成されていったかを振り返る³⁶⁾。あの日の世界が自分の目にどう映っていたか、そしてその世界でなにが起こっていたのかについて考えをめぐらせながら。

ゲジーネにとって、記憶は猫のようなものである。気まぐれな「記憶猫」³⁷⁾は、記憶の持ち主の意に反して自由気ままに駆けめぐる。ときには抜け落ちた記憶を補完し、すがたかたちを変えたりもする。嫌な思い出には触れずに、そのままやり過ごすこともし

ばしばだ。話の流れに沿って自在に「物語」を変化させる母にマリーは戸惑いを隠せないことも多く、「自分がわからないところは飛ばして、そうされるとわたしはこれっぽちもわからない。[...] 話をするときに足りないものは、ほかのもので全部埋めて、そうされるとわたしはやっぱり信じてしまうのよ」³⁸⁾と不満をこぼす。

- わたし [ゲジーネ] はあなたに真実を約束したことはないわ。
- そうね。ただ、あなたの真実だけ。
- わたしがそれをどう捉えているか。³⁹⁾

生き生きと飛び跳ねるゲジーネの「記憶猫」は、事実をものともしない。たとえ確証のないことであっても、信念を持って断言するだけの強さを持ち合わせているのである。父クレスパールに絶大な信頼を寄せている彼女に、D. E.は感嘆を禁じ得ない。

君は行く先でこう言うんだ。お父さんにとって復讐は重要じゃなかった、ナチス相手に手を汚すようなことはしなかった。それは不可解な確言でしかないというのに、証明のしようがないのだから。それでも僕は言葉通りに君を信じてしまうんだ、君と一緒に駆け抜ける真実として。しばしば真実として。⁴⁰⁾

D. E.はゲジーネのようにのびのびと話す術を持たない。思い出したくない過去の前を素通りすることもできない。彼にできることは、事実をありのままに告げるだけだ。語りたくない思い出は沈黙し、封印されなければならない。ゲジーネがD. E.の過去を「すべては現存していて自由に呼び起こすことが可能だが、生きていない」とする所以はここにある。

かつて親戚とともにフィッシュラントで余暇を過ごしていたゲジーネは、対岸にあった強制収容所の存在を終戦後にはじめて知った。以来、彼女は罪の意識から当時の夏休みの記憶を甦らせることができない⁴¹⁾。D. E.が自らの記憶と距離を置くに至った経緯は述べられていないが、戦争に巻き込まれ、妹を亡くすという壮絶な体験をした彼も、ゲジーネ同様に平穏であった日々の記憶に立ち戻れずにいるのだろう。二人を決定的に分けるのは、己の記憶との向き合い方だ。生きるために、そして新たな一步を踏み出すために、D. E.には自分自身の記憶を封じる必要があったのではないかと考える。

3. 3 アメリカ人になったメクレンブルク人

しかし実際には、D. E.の身の周りはメクレンブルクの記憶を思い起こさせるものであふれている。自然に囲まれたコロニアルスタイルの農家を模した自宅は、ニュー・ジャ

ーギーの景色と合わせてヴェンディッシュ・ブルクの面影を感じさせる。書齋には『メクレンブルク・シュヴェリーン大公国の芸術的・歴史的文化遺産』や『ヴォシドロー教授の集めた言葉』、『ヨハネス・ニヒトヴァイス氏のメクレンブルク農民追放に関する意見』といったメクレンブルクに関する書籍が収められており、東ドイツから古書カタログを取り寄せていることから、今も折を見てはメクレンブルク関連の図書を集めていることが伺える。メクレンブルク地方の方言である東低地ドイツ語も流暢に話し、ゲジーネと母親に対しては失われた故郷と結びつける言葉として、メクレンブルクを知らないマリーに対してはエンターテインメントを提供するツールとして駆使している。N・メクレンブルクは D. E.のたゆみない努力の上に成り立つメクレンブルクとの結びつきを表面上のものに過ぎないとしているが⁴²⁾、これらの思い出に浸っているのは D. E.自身ではない。家の管理を母に任せ、余暇を自宅周辺とは対照的な境界であるニューヨークの「ブロードウェイの 96 番通り、リバーサイド・ドライブから二ブロック離れたところに軒を連ねるバー」⁴³⁾で過ごすことが多い D. E.は、むしろ生まれ故郷と一定の距離を取っているかのように見える。クレスパール母娘を自宅に招いた際にも、母親にメクレンブルクの話をするように促しているものの、自分の昔話は一切しない。

- こうしてあなたは三時間もかたい椅子の上に座って耐えていたのね、
D. E.
- そうでもしなきゃ、彼女 [母親] はテーブルに着いて語ろうとはしなかったさ。
- そして、マリーが退屈するかもしれないというリスクを冒したのね。
- 彼女は怒りっぽくはないよ。
- あなた、それはわたしを喜ばせると思ったのね、D. E. ?
- どういたしまして、ゲジーネ。⁴⁴⁾

家や資料、方言や思い出話といったメクレンブルクの面影が宿ったものの数々を必要としているのは D. E.自身ではない。これらはすべて、失われた故郷に思いを馳せる恋人や母親のために準備されたものなのである。

D. E.の記憶は、たしかにもう「生きていない」。しかしながら彼は、K・フェルスナーが主張するようにメクレンブルクの思い出すべてを消し去ったわけではない⁴⁵⁾。ハイケの例が示しているように、D. E.は自分自身の記憶と直面できない。だからこそ彼は、できる限り自らの過去から遠ざかろうと試みる。自分の記憶から感情を切り離し、残った「事実」をアーカイブの中のように整理する。そうして記憶を管理することによって、D. E.はようやく過去に起こった出来事を俯瞰することができるのである。こうした一連のプロセスは、彼がゲジーネや母親のために失われたメクレンブルクの再生に心を砕く

ことを可能にする。しかし記憶を情報として保存するということは、記憶を忘れることができないということをも意味する。忘却が許されない以上、D. E.は美しいとは言い難い記憶を背負って生きることを余儀なくされているのである。それらは「生きていない」のかもしれない。それでもD. E.もまた、ゲジーネとは違ったかたちで過去とともに生きているといえるだろう。

4. 望むものはなにか

1953年の暴動のあと、「より少ない害悪を選ぶことにした」⁴⁶⁾D. E.はメクレンブルクで過ごした日々⁴⁷⁾に別れを告げ、西ドイツへと旅立った。彼のレーダー技術に関する専門知識を高く買ったアメリカ政府が、彼に渡米の要請を出したのは1960年のことである。アメリカ空軍の技術コンサルタントとして二万五千ドルの年収を稼ぎ、中古とはいえ高級車であるベントレーを所有し、住宅ローンを組みながらも一軒家を購入したD. E.は、富裕層への仲間入りを果たしたといえる⁴⁷⁾。

アメリカの習慣や文化になじみ、アメリカの国籍も取得したD. E.の人生は、順風満帆であるかのような印象を与える。しかし彼は、物心ついたころからアメリカで生活をしているマリーとは違い、「あっさり⁴⁸⁾とアメリカを新しい故郷として受け止めた」わけではない。順調な暮らしぶりとは裏腹に、D. E.の心は冷え切っているのである。

4. 1 故郷なき人

アメリカでは「研究者」としてではなく「技術者」として働いているD. E.だが、彼が勤務している企業はアメリカ空軍も運用する遠距離早期警戒線^{D E W L I N E}に関する。ベトナム戦争に反対しているゲジーネは、「軍備に携わっている」⁴⁹⁾恋人を批判せずにはられない。D. E.自身も「僕は防衛のために働いているんだ」⁵⁰⁾と自己弁護をする一方で、自分が戦争に加担せざるを得ない仕事に従事していることについて深く失望している。

僕はもう、そう見えることを否定しない。僕が仕事では不在でいること、ただ能力だけそこにあって、人間としてはそこにいないこと。自分の仕事を正当化することを、とっくに諦めてしまったこと。⁵¹⁾

ゲジーネがアメリカ社会に適應できない理由の一つとして挙げられているのが、彼女が仕事を通して覚える疎外感 *Entfremdung* である⁵²⁾。勤め先であるアメリカ系の銀行内で、ゲジーネは「決まった役割を与えられた人間」として機械的に仕事をこなし、個として振る舞うことができずにいる。同僚から見れば「正体不明。誰でもない、カムフラージュされている。見分けがつかない」⁵³⁾存在である自分を、ゲジーネ自身でさえ「あれは別人よ」⁵⁴⁾と称している。ソ連とアメリカ双方のやり方に納得がいかないD. E.も、「こ

のもつれたシステムの中では、僕はどんな職業をもってしても機能でしかないのだろう。そんな職業についているんだ、僕は」⁵⁵⁾と語っている。彼もまた、ゲジーネと同種の疎外感を覚えながら生きているのである。

「疎外感が生じる場所は、故郷ではない」のだとすれば、仕事、ひいては国のシステムに同調することができない D. E.にとって、アメリカは——別れを告げたメクレンブルク同様に——故郷ではないということになる。彼はアメリカを新たな故郷として認めたわけではなく、生きていく上で妥協をしたに過ぎない。ゲジーネのように過去のしがらみを持っていないために割り切った考え方ができる D. E.は、純粋な好奇心から向こう二十年の年月を「ただ見ていたい」⁵⁶⁾のだと言う。「待つ」と呼ぶその行為からは、微かな望みさえ垣間見ることはできない。

思い描いた理想のために自らを奮い立たせるゲジーネとは異なり、D. E.を捉えているのは深い諦念である。ソ連とアメリカの両方に幻滅させられ、未来に対して希望を抱くこともできない彼は、「帰りたい」「暮らしたい」と思えるような特定の場所を持たずにいるのである。

4. 2 希望という名の故郷

失望に失望を重ねた D. E.の目に映る世界は、欺瞞で満ち溢れている。どれほど成功を取っても、彼の心が満たされることはない。期待することを止め、世の移ろいを静かに傍観することに決めた D. E.だったが、ゲジーネとの出会いが彼の心に変化をもたらす。

君 [ゲジーネ] はそんなふうには生きていない。君にとっては、まだ本当のものが存在しているんだ、死や、雨や、湖が。記憶の中では知っているのに、僕はそこに戻ることができない。僕にとって本当のように思われるのは、君なんだ。⁵⁷⁾

D. E.と同じくメクレンブルクを後にしたものの、過去も出自も希望も手放さなかったゲジーネは、彼とは正反対の道を歩む。たとえ自分がアメリカで従事している仕事に納得がいかず、「ときどき不可能であるように思える」⁵⁸⁾ことがあるとしても、「子どものころの夢」社会主義の実現をかたく信じつづけている。やがてゲジーネはチェコスロバキアの「人間の顔をした社会主義」に新たな希望を見出す。プラハの春に懐疑の目を向けていた D. E.は当初、銀行の命を受けてのプラハ出張が決まったゲジーネを引き留めようと試みるが、ついには譲歩の姿勢を見せるようになる。

君は諦めなかった。僕だったら、きっと信じられなかったに違いない。君には賛同できる。君は今も倦むことなく、社会主義の約束を言葉通り

に受け止める。帝国主義的な民主主義に向かって、気高く記された憲法を頑固なまでに突きつける。グネーツの営庭で行われた新兵の祝福に戦争のための道具が含まれていたことに対して、今も教会を許すことができないでいる。もしこれが素朴さだというのなら、僕はこの持続する教育問題に喜んで騙されたい。でもこれは希望なんだ。⁵⁹⁾

D. E.自身が認めているように、ゲジーネは彼とは正反対の生き方を示している。彼がすでに失ってしまったもの、諦めてしまったもの——理想や信念、そしてなによりも希望を持ち続けるゲジーネは、D. E.の人生に光を投げかける唯一無二の存在である。「これらはみんな、僕が説明できないものなんだ。分解したいと思いたくないような性質を、これらは持っている。ただ、その近くにいることができれば」⁶⁰⁾と D. E.は手紙に綴る。自分が口にすれば陳腐に聞こえてしまう言葉も、ゲジーネにかかれば命が吹き込まれる。自分には思いつくことができない表現を用いては、さりげなく心を癒してくれる。D. E.にとって「本当のように」感じられるゲジーネは、未来を信じる心を取り戻してくれるただ一人の存在なのである。どんなに救いのない世界でも、彼女のそばにいられるならば生きていくことができる——残りの人生を「待つ」だけでなく、「生きる」ことができる可能性とともに、D. E.はゲジーネの中に最後の希望を見出しているのだ。彼が求めているのは、具体的な場所ではない。すべてを投げ出していたD. E.が望むもの、それはどのようなかたちであれゲジーネの隣で生きられること、ただそれだけなのである。

5. まとめ

過去と対峙するゲジーネと、過去から目を背けるD. E.の生き方は、確かに対照的である。しかし記憶を封じ込め、己から切り離そうと試みても、D. E.は忌々しい過去を背負って生きていかざるを得ない。転居を重ね、たどり着いたアメリカも第二の故郷にはなり得ず、ただ生きる上で現状と折り合いをつけているに過ぎない。物事と向き合う姿勢こそ異なるが、ゲジーネとD. E.は常に似たような状況に身を置いている。どちらも故郷を失い、新たな故郷を見つけられずにいるのだ。

社会主義が実現され得る場所に希望を見出すゲジーネとは違い、D. E.は理想郷を思い描くことをとっくに諦めてしまっている。「帰りたい」「暮らしたい」と思える特定の場所を持ってないという意味において、D. E.は故郷を持たない人間であるといえるだろう。しかし故郷となり得るのは、先に挙げた出身地ないし定住地、あるいはユートピアといった「場所」に限らない。宗教や希望といった、確固たる実体を持たない神学的・哲学的な観念もまた、失われた故郷の代用として機能し得るのである。文化人類学者のI・M・グレーヴェルスは、故郷を次のように定義している。

この空間——素朴に、あるいは回想を通じて体験された『自己の世界』を伴う「安全が保たれている場所」、「行動を起こす場所」そして「同定できる場所」——物質的・精神的な行動の安全性が付随された空間が最大限の充足を約束したとき、「故郷」という価値概念が示すように、その空間を「自己同一性を保持する場所」とすることができる。⁶¹⁾

ここで用いられる「空間」という言葉は、具体的にも抽象的にも捉えられる。幼年期、心に残る情景、家族、仕事、ユートピア、宗教、希望——特定の「場所」に故郷を見出すことができなくとも、自己同一性を保持することができる対象に故郷の代替を求めることは十分に可能なのである。D. E.の場合、ゲジーネという存在に投影された希望が彼の失われた故郷に相当するといえる。

本稿で示した D. E.の例は、『記念の日々』に見られる多様な故郷のあり方の一つに過ぎない。ドイツに見切りをつけ、異国であるイギリスに腰を据える決意をしたゲジーネの父ハインリヒや、イギリスの生活になじめず、身重のまま生まれ育ったメクレンブルクに戻った母リースベート、ドイツで過ごした記憶を忘れ、アメリカ人としてニューヨークの生活に順応した娘のマリーのほか、アメリカに亡命したユダヤ人や、第二次世界大戦後にドイツ領を追われたドイツ人や民族ドイツ人など、『記念の日々』には実に様々なかたちの「故郷」が描かれている。先行研究ではゲジーネと彼女の「故郷」ばかりが注目されてきたが、彼女を取り巻く人々の故郷像にも目を向ける必要がある。

故郷という概念は肯定的に捉えられる傾向にある。ユダヤ系オーストリア人作家であるジャン・アメリは著作『人間はどれほど多くの故郷を必要とするのか?』において、「故郷を一つも持たない状態は望ましくはない」⁶²⁾と述べている。ニーチェは『憐み千々に』という詩の中で、「哀れなりは、故郷を持たぬ者」⁶³⁾とうたっている。しかし D. E.の例が示すように、故郷は否定的にも捉えられる概念である。故郷とはどのようなものなのか、なにが故郷となり得るのか、そもそも人間は故郷を必要としているのだろうか。グローバリゼーションと移住の時代を迎え、故郷の定義が揺らぎはじめた今、『記念の日々』に現れる複雑かつ多様な故郷のあり方は、改めて問い直さなければならない。

注

1) Mecklenburg, Norbert: Die Erzählkunst Uwe Johnsons. Frankfurt am Main 1997, S. 337.

2) 同上。注記のない引用文はすべて拙訳である。

3) Reich-Ranicki, Marcel: Uwe Johnsons neuer Roman. Der erste Band des Prosawerks *Jahrestage*. Aus: Der Spiegel, 5. 10. 1970. In: Bengel, Michael (Hg.): Johnsons *Jahrestage*. Frankfurt am Main 1985, S. 141.

この批評は『記念の日々』第一巻の発売に際して行われたものである。ヨーンゾンの死後、ラ

イヒ＝ラニツキは『記念の日々』の最終巻（第四巻）を「傑作」として高く評価している。

参考文献：Reich-Ranicki, Marcel: Der trotzige Einzelgänger (1984). In: Neumann, Uwe (Hg.): Johnson-Jahre. Zeugnisse aus sechs Jahrzehnten. Frankfurt am Main 2007, S. 381.

- 4) Neumann, Bernd: Utopie und Mimesis. Zum Verhältnis von Ästhetik, Gesellschaftsphilosophie und Politik in den Romanen Uwe Johnsons. Königstein/Ts. 1978, S. 297.
- 5) Pokay, Peter: Utopische Heimat – Uwe Johnsons *Jahrestage*. In: Studia Germanica Posnaniensia X. Poznan 1982, S. 51-76.
- 6) Mecklenburg, Norbert: Erzählte Provinz. Regionalismus und Moderne im Roman. Königstein/Ts. 1982,および Die Erzählkunst Uwe Johnsons.
- 7) Brude-Firna, Gisela: Zur Funktion des Heimatbegriffs in Uwe Johnsons Tetralogie *Jahrestage*. In: Seliger, Helfried W. (Hg.): Der Begriff Heimat in der deutschen Gegenwartsliteratur. München 1987, S. 29-38.
- 8) Bausinger, Hermann: Heimat in einer offenen Gesellschaft. Begriffsgeschichte als Problemgeschichte. In: Cremer, Will/Klein, Ansgar (Hg.): Heimat, Band 1: Analysen, Themen, Perspektiven (=Schriftenreihe der Bundeszentrale für politische Bildung, Bd. 294/1). Bonn 1990, S. 76-90, hier: S. 76.
- 9) Das Deutsche Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm. Online-Wörterbuch. <http://www.dwb.uni-trier.de/> (Stand: 22.05.2011)
- 10) Duden. Deutsches Universalwörterbuch. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich 2006. (6. Auflage)
- 11) Mecklenburg, Norbert: Die Erzählkunst Uwe Johnsons, S. 362.
- 12) Mecklenburg, Norbert: Poetisches Hinterland. Notizen zur literarischen Heimatwelle. In: Neue Zürcher Zeitung. Freitag, 4. Januar 1980, Fernausgabe Nr. 1a.
- 13) 『希望の原理』の最後の一文は、故郷を論じるにあたってたびたび引き合いに出される。「[...] そのときには、世界のなかに、すべての人間の幼年期を照らしだすものであるとともにまだかつて誰も行ったことのないところ、すなわち故郷が成立するのである。」(P. 610) — 山下肇他訳『希望の原理』第三巻、白水社、1982年。
- 14) Schmitz, Peter Martin: Studien zum Heimatkonzept in Uwe Johnsons Roman *Jahrestage*. *Aus dem Leben der Gesine Cresspahl*. Bologna 2004. 題目に含まれる作品タイトルは原文ママ。
- 15) Felsner, Kristin: Perspektiven literarischer Geschichtsschreibung: Christa Wolf und Uwe Johnson. Göttingen 2010.
- 16) Pokay, Peter: Utopische Heimat, S. 70; Felsner, Kristin: Perspektiven literarischer Geschichtsschreibung, S. 458; Mecklenburg, Norbert: Leseerfahrung mit *Jahrestage*. In: Arnold, Heinz Ludwig (Hg): Text + Kritik. Zeitschrift für Literatur. Uwe Johnson. Heft 65/66, München 1980, S. 48-62, hier: S. 56; Mecklenburg, Norbert: Die Erzählkunst Uwe Johnsons, S. 348.
- 17) Pokay, Peter: Utopische Heimat, S. 62.
- 18) Felsner, Kristin: Perspektiven literarischer Geschichtsschreibung, S. 454.

- 19) Johnson, Uwe: *Jahrestage. Aus dem Leben von Gesine Cresspahl*. 4 Bände, Frankfurt am Main 1970-1983, S. 339. 以下、*Jahrestage* は JT と省略する。
- 20) JT, S. 1822.
- 21) JT, S. 41.
- 22) Mecklenburg, Norbert: *Die Erzählkunst Uwe Johnsons*, S. 348.
- 23) JT, S. 990.
- 24) JT, S. 340.
- 25) JT, S. 683.
- 26) JT, S. 1144.
- 27) ドイツ語の *Geschichte* という言葉には「歴史」と「物語」という意味があるが、『記念の日々』では両方の意味を併せ持っている場合が多い。たとえば、ドイツで暮らしていたころの記憶をほとんど持たないマリーがゲジーネに望む *Geschichte* は遠い歴史であり、彼女にとっては現実味のない物語でもある。そんなマリーが D. E.に求めるのもまた、一種の「物語」なのである。
- 28) JT, S. 1143 f.
- 29) JT, S. 1149.
- 30) JT, S. 1150.
- 31) 東プロイセン領に住んでいたアニータは、戦後、西へ向かう途中で赤軍兵士に捕えられ、輪姦された。当時十一歳だった彼女は命を落とさずに済んだが、後に性病を移されていたことがわかり、子どもが産めない体になってしまう。
- 32) Mecklenburg, Norbert: *Die Erzählkunst Uwe Johnsons*, S. 420.
- 33) JT, S. 817.
- 34) JT, S. 1327 f.
- 35) JT, S. 270 など。ゲジーネは全作を通し、過去の自分をたびたびこのように呼んでいる。
- 36) 現在は過去の積み重ねであると考えられるゲジーネに対し、マリーは不服を述べている。「たびたびわたしはぞっとするのよ、このイェーリヒョーの人々があなたを作ったんだって、そう信じられることが。あなたが今あなたでいるのは、あの人たちがそうであったからなんて」(JT, S. 562)
- 37) „Die Katze Erinnerung“; JT, S. 670.
- 38) JT, S. 670.
- 39) Ebd.
- 40) JT, S. 818.
- 41) JT, S. 1494.
- 42) Mecklenburg, Norbert: *Die Erzählkunst Uwe Johnsons*, S. 348.
- 43) JT, S. 40.

- 44) JT, S. 272. 引用箇所のアリチック体は原文からのもの。
- 45) Felsner, Kristin: *Perspektiven literarischer Geschichtsschreibung*, S. 459.
- 46) JT, S. 41.
- 47) 1967 年当時、アメリカの工業・産業界で得られる平均的な年収は 5975 ドルであった。D. E. はその四倍以上の年収を稼いでいたことになる。
参照文献 : Helbig, Holger/Kokol, Klaus/Müller, Irmgard/Spaeth, Dietrich/Fries, Ulrich (Hg): *Johnsons Jahrestage. Der Kommentar*. Göttingen 1999, S. 92.
- 48) Felsner, Kristin: *Perspektiven literarischer Geschichtsschreibung*, S. 460.
- 49) JT, S. 41.
- 50) Ebd.
- 51) JT, S. 816.
- 52) Pokay, Peter: *Utopische Heimat*; Neumann, Bernd: *Utopie und Mimesis*; Mecklenburg, Norbert: *Die Erzählkunst Uwe Johnsons*; Kristin, Felsner: *Perspektiven literarischer Geschichtsschreibung*. 参照。
- 53) JT, S. 1036.
- 54) Ebd.
- 55) JT, S. 816.
- 56) Ebd.
- 57) JT, S. 817.
- 58) JT, S. 819.
- 59) JT, S. 818.
- 60) Ebd.
- 61) Greverus, Ina-Maria: *Der territoriale Mensch*. Frankfurt am Main 1972, S. 56.
- 62) Améry, Jean: *Wieviel Heimat braucht der Mensch?* In: *Jenseits von Schuld und Sühne. Bewältigungsversuche eines Überwältigten*. Stuttgart 1977, S. 74-101, hier: S. 101.
- 63) Nietzsche, Friedrich: *Mitleid hin und her*. In: Friedrich Nietzsche. *Sämtliche Gedichte*. Zürich 2000, S. 133 f.

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。